

新座主竹田との提携

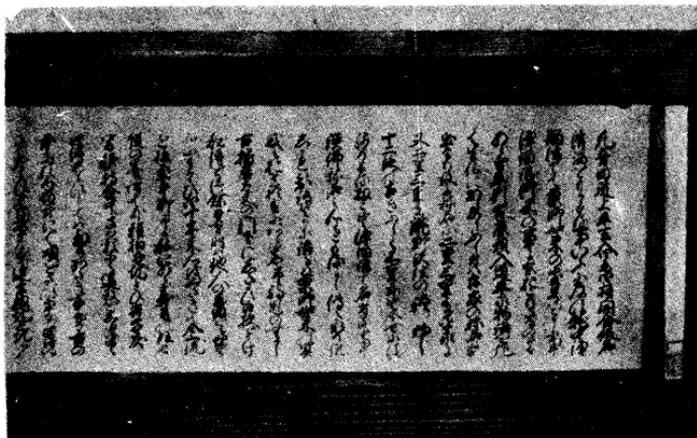
舞臺で發病、義太夫の終焉

元祿が終つて世は寶永元年の秋と移つていつた。こゝに義太夫生涯の上に大きな謎が投ぜられたのである。凡そ偉人とか、大藝術家などには往々にして、普通人のちよつと窺ひ知ることの出来ない神秘的な心の動搖があるものである。これもその一つには相違ない。

竹本筑後掾こと病氣により竹本座の座本を退く――。

さあ解らない、新派淨瑠璃義太夫節なる一流を興し、生涯をこれに打込んでゐる筈の義太夫、十九年間の苦節を忍んで、とても常人の及びもつかない堅忍持久を續け、ちつとやそつとの辛抱でなかつた辛抱をして、悪戦苦闘を續けて來た義太夫、而かも近松門左衛門下阪によつて、やつと「曾根崎心中」なる好狂言を得て、藝術的にも經濟的にも立派に成功したその一年を出ずして、些々たる病氣ぐらゐで竹本座の座本を退くといふのだから、ことはいよいよ解らない、

とても想像が出来ない、藝術家にのみ許される、何か特異な心持が突如として義太夫に起つて来たのに違ひない。かうして義太夫は、ひとりさつさと舞臺生活から退いて行つてしまひくると頭を剃髮して、道喜といふ法號に改め、拍手扇を持つた手に珠數をつまぐり、床本を經卷に代へて、朝夕を御寺詣でに過ぐすといふ、たいへんな變りやうである。驚いたのは門弟達である、義太夫節は茲に又新しい境地を拓いて、ますます世間に認められようとしてゐる大事の瀬戸際、その頭領に出してしまはれては、杖に離れた盲人同然、これでは、なんにもかもまる潰れだ。門弟達は當然これを黙つて見てゐるわけには行かない、さつそくに、一同はこぞつて義太夫の面前へ出て、涙をふるつて復座を嘆願した。門弟達が縷々述べるところの一言一句、もとより義太夫節の前途を思うての上からであり師弟の情まことに濃やかに、熱誠おのづから面にあふるゝばかりである。これを聞いてゐる義太夫とて、もとより人一倍血も涙もある人間だ、門生が訴ふるところの至情の言葉には動かされぬわけには行かなかつた。さうして徐かに義太夫節の百年の後を考ふる時、どうも今度の行動は輕率であつたやうに感じたのである。實を云ふと、義太夫の腹の底には、例の十九年間の忍苦の生活を追懷すると、今が舞臺の引き潮時だと考へたのもあつたが、さらに又考へ直して見ると、それは一身の安樂、老後の安逸を



(夫太義) 據後筑

狀盟連人門並訓教夫太義

のみ目がけた功利的な考へであつたと覺つた。義太夫節と云ふ大局から觀れば不忠實である、多くの門弟から眺めればいかにも無慈悲な譯であつた。自分は藝道の爲に身命を捧げてゐる筈であつた、假りにも自分勝手に行ひは許されない。かう氣がついて門弟達の前に、生涯を斯道の爲めに盡すことを堅く誓つて、再び舞臺人として復活したのであつた。

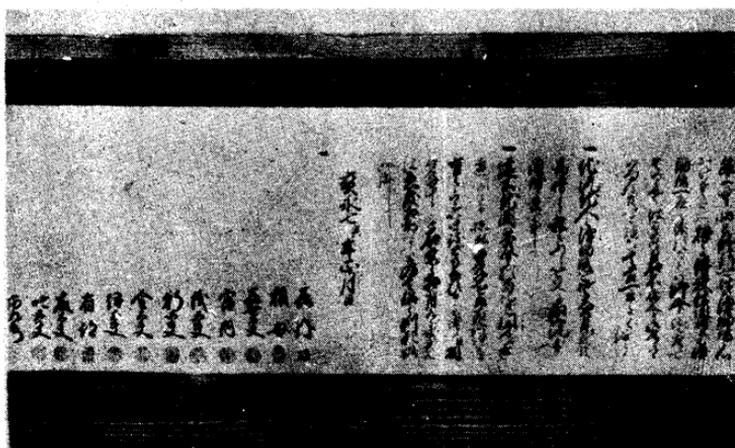
これで義太夫節は危く中絶するところをまぬがれたわけである。

義太夫が心機一轉したその時、かねてからくりや水からくりの發明で成功した竹田近江が、その子の出雲に財産を領けてやつて、それに人形淨瑠璃の經營をやらせて見ようといふ考へを持つてゐる



た。そこで義太夫に説いた、義太夫は悦んで、一番重荷に思うて居た竹本座経営上の一切物質的責任を彼に譲つて、ヤレヤレと安堵した。以來座本はいよいよ竹田出雲となり、義太夫はこれで藝道一方に精進出来ることゝなつた。

淨瑠璃史上に記念すべき組織改革後の竹本座の第一回興行が、いよいよ開場されることゝなつた。時は寶永二年十一月(三月説もあり)近松門左衛門作「用明天皇職人鑑」を上演。此時あらためて竹本座から發表してゐる繪入淨瑠璃「用明天皇」の表紙見返しの繪にある幹部連名を見ると、座本竹田出雲掾、太夫竹本筑後掾、三味線竹澤權右衛門、おやま形辰松八郎兵衛、作者近松門左衛門として畫像と名とが記されてゐる。近松が大阪に永住



するやうになり今までの囑託の作者から、判然と
 座附作者として招聘されたのは此時からであらう
 と思はれる。名にし負ふ豪華をもつて鳴つてゐた
 からくり成金の竹田近江が後見となつて、名目上
 の新座主出雲を督して経営案を立て、人形の作り
 替へ、衣裳の新調、道具の改造、すべては一變し
 て華美に成り、舞臺面の轉換には得意のからくり
 細工を應用し、嶄新な趣向を創め出したのである。
 従つて在來の竹本座の執つた藝術本位の方針は第
 二義となり、夥しく興行的色彩が濃厚になつて來
 たのだが、義太夫は何んな顔をしたらうか、おそ
 らく微笑を洩らしてゐた事と思はれる。さて新
 座主は作者、太夫、三味線、人形に當代第一流を
 網羅したその上に、嘗て分れて豊竹座を創立した

喜ばせた。たゞに見物を喜ばせたばかりでなく、これがそもそも太夫出語りの濫觴なのだから、すこし當時の實際を述べて置かう。

戯曲や歌舞の類に謠曲道成寺を轉用した所謂「道成寺物」と稱するものは、可なり澤山にあるがこの鐘入りの段も、つまりはそれで頗る奇抜な趣向に劇化してゐる點、殊にその構造の群を抜いて大まかな點から見て或は謠曲以上かも知れない。謠曲では貴族的優美な白拍子であるシテ女を、思ひ切り大衆的な飯たき女に變へて登場させ「これは此國の傍らに、下司奉公の勤めをいたす飯焚きの女にて候」と語らせ、先づ見物の意表に出て耳目を驚かしてゐる。これは單に奇抜な趣向をしたといふばかりでなく、町人の都としての大阪の土地にふさはしく、作者が平民化した一つの見識でもある。而かも此一段の文章は、作者獨特の景情備はつた麗文で、絢爛自在の趣きがある。こゝを演者義太夫は苦心の節調で語りこなしたのでから、この一幕が當興行中隨一の呼び物になつたのは當然である。日本で始めて出來た遊君の元祖、播州室の津の室君が假りに飯焚きの女中に姿をやつして、その夫が世を忍んで住む播州高砂尾上の濱へ訪づれてくる。そこには海中から現はれた天竺の祇園精舎の名鐘があつて鐘供養が行はれてゐるので、女人の出入りは禁制といふことになつてゐるが、室君はある誤解から嫉妬に燃え立ち心

狂亂して、鐘供養の庭へ侵入する。そして鐘の中へ姿を隠す。この大騒動に、豊國禪師が弟子を引連れて出て大祈禱をすると、効験忽ち現はれて鐘は自づと躍つて鐘樓へ引き上げられる。

「アレ見よ蛇體は顯はれたり」でいよいよ一日中の大評判である「鐘入りの段」が始まるのである。

當時の舞臺の有様をいふと、正面に翠簾が吊るされてゐて、太夫三味線弾き等はその内部で勤め、人形遣ひはその前面で技藝を演じたものである。舞臺の全部を今日の文樂座で見るやうに總て人形の領分に占有させ、太夫三味線の席が側面に遷された形式は義太夫や近松歿後の變革である。この變革がやがて操淨瑠璃が歌舞伎に壓倒されて行つた變轉を物語るものだと云つてもよらう。

さて此時、この晴れの記念興行を意義あらしめる爲め、義太夫はいつも翠簾の内て語る例を破つて、それを高く掲げさせ、顔を見物の前に現はして語る例を始めた、この新しい形式を出語りと稱したのである。いよいよ鐘入りの段となると、正面の簾がさらさらと上る、そこにはシテ、竹本筑後掾が見臺を控へ、鱗形の模様のある袴を着て（室君の蛇身に因む）一刀を佩し、扇子を斜に構へて坐つてゐる。ワキには竹本難波、三味線の竹澤權右衛門が九枚笹の紋模様の

裯に三味線を抱へてズラリと居並ぶ、かういふ舞臺の光景に始めて接した見物はドツとはかりに喝采した。

その前では、これもおやま人形の辰松八郎兵衛が全身を現はして、曾て曾根崎心中で試みた出遣ひの形式で、思ふ存分室君の蛇體を操つて満場を酔はしめた。

なほ又義太夫はその冒頭の名文、

涙川戀の氷に閉ぢられて、身を切り碎く思ひより、浮き川竹の憂き節を、せめて聞もる月だにも、あはれ枕に訪ひも來ず、我れ一人寢となりたるぞや。

ひとり立つたる一ともと薄、妬みの露の重たさよ。

特に巧い節調で語り生かしたものと見えて、市中の一口淨瑠璃にも口ずさまれたといふことである。

なほもう一つこの淨瑠璃で、義太夫の見識といふものが現はれて感銘のふかい事は、本文のうち、廓の遊女の年中行事、紋日の事を敘べたくだり、

人のよろこぶ日と云へば、我はなげきのます鏡

に飾付けられた「愁ひの冷泉節（れいぜんぶし）」についてである。

本來冷泉節といふものは、古淨瑠璃「十二段」にある「さてもやさしや冷泉」の句につけられた華やかに艶麗な節廻しを云つたもので（冷泉とは三河の國矢矧の長者の娘淨瑠璃姫に仕へた侍女の名である）あるが、義太夫はわざとこれを愁ひの文章に使用したのである。かうした試みは、古淨瑠璃派の人から見ると、破格の振舞、異端の業であるが、果せるかな批難の矢を浴せられたが、義太夫は自己の信念の上に試みたことだからビクともしない、歡樂の極みと哀傷の極みはわづかに薄紙一枚を隔てた差異に過ぎない、廓の女の愁ひには華やかなうちに悲しみを表はさねばならない、艶麗なうちにも何處か哀愁を帯びた「冷泉節」こそ恰好の節調であると信じたからである。これは勿論口で語るといふより心持で情を活かして語らねばならぬだけに、古來至難の節調として傳へられてゐる。されば二世竹本義太夫（政太夫）もその門下に説いて「これは愁ひの冷泉なり、常の冷泉に語れば、人形いそいそとして嬉しさうに躍るべし、文句に氣をつけるべし」と訓へてゐるほどである。

用明天皇職人鑑以後の十年、義太夫はひきつゞいて、竹本座に出演してゐるが、記録はその上演狂言を左の如く示してゐる。これはもとよりその重なるものであるが。

「傾城反魂香」「心中二枚繪草紙」「兼好法師物見車」「碁盤太平記」「曾我扇八景」「吉野

忠信」「堀川波の鼓」「緋縮緬卯月紅葉」「同潤色」「丹波與作」「酒吞童子枕言葉」「心中
萬年草」「淀鯉出世瀧徳」「五十年忌歌念佛」「梶狩劔本地」「今宮心中」「百合若大臣野守
鑑」「心中双水朔日」「夕霧阿波鳴渡」「冥途の飛脚」「吉野都女楠」「嫗女姥」「傾城吉岡
染」「長町女腹切」「天神記」「孕常磐」「大職冠」「相模入道千匹犬」「娥歌加留多」(以
上近松門左衛門作)

正徳四年八月義太夫節開拓の大事業をあとにして、竹本座に於ける「娥歌加留多」を上演中
に一世の大藝術家、竹本筑後掾藤原博教は病を發し、遂に六十四歳を一期として永眠の客とな
つた。

貞享元年、新派義太夫節を發表して以來、舞臺上の生活を續けること三十有餘年。その間淨
曲百三十餘番を語り、内新作狂言實に九十餘番の多きに及んでゐる。

門葉また多士濟々で、竹本派二世の棟梁、竹本政太夫、豊竹派の始祖若太夫を始め、老巧の
陸奥茂太夫、美音の竹本頼母、内匠理太夫、竹本大和太夫、竹本難波、竹本文太夫、竹本幾代
太夫、竹本萬太夫、多川源太夫、長嶋重太夫、二つ井彦太夫、その他枚舉に遑がないが、寶永
七年一月に作製された門下連盟狀の人員を數へると、總員七十八名に上つてゐる。

送葬の當日には、白無垢姿に跣足の門弟、老若擧つて五十四人首うなだれて棺側に添うた。

生家は既に述べた天王寺村南畑越であるが、その後竹本座の道頓堀に近い、日本橋筋一丁目（千日前法善寺東門東へ突當り）に居を定め、而かもそれが竹田出雲の宅と隣り合はせてあつたが、晩年は自分だけ別に、日本橋三丁目（今の二丁目）に住んでゐた。臨終の地は即ちこゝである。

墳墓は、菩提寺に當る天王寺の南、土塔山超願寺に現存してゐる。但し、墓石は最初の物ではなく、文化十年その末葉竹本喜義太夫なる人が、百年忌追福の擧のあつた前後に建てたものらしい。さうして、碑面に刻まれた竹本の定紋が、どうしたことか竹田出雲の紋になつてゐる。

（義太夫は鞠はさみの中に九枚笹、出雲は竹の中に九枚笹）その他には、天王寺西門、納骨堂の裏に、寶篋印式の古雅な筑後掾墓塔がある、これは高弟であり富裕者であつた豊竹若太夫が一個建立になる、師恩追慕の紀念塔である。

後繼者政太夫の偉業

二十四歳で櫓下となる非凡兒

土を耕し、種を蒔き、三十餘年の水の間、毎日てしほにかけて育て、來た、義太夫節がやうやうに緑の葉を出し、末の繁茂を見せようとしてゐる時、惜しいかな、主の義太夫は死んでしまつた。もしもこの若樹を、このまゝに捨て、置いたら、云ふまでもなく、そのまゝ枯れ果てて了ふであらうが、天、義太夫の誠意を嘉納しましたし、美事な後繼者を義太夫にくだされた。

話はすこしもとへ遡る。正徳四年九月十日、一座が杖とも柱とも頼む義太夫に先立たれた、多くの門弟や竹本座の連中は、悲痛哀傷のうちにも氣にかゝるは、明日からの竹本座の運命である。さうして更に痛切な問題は、義太夫に代るべき櫓下の名前主である、座長の後繼である。これは一日も忽に出來ぬことだつた。いつたい誰れになるのだらうと、かうお互ひには云つてゐるものゝ、そこは人間の淺間しさ、高弟達の中では、内々肚づもりで此名譽を荷ふべきもの、